

Women's Studies Forum 創刊10周年を想う

別 府 恵 子

「機関誌の名称は?」「表紙の色は何色に?」と何度となくミーティングを重ねて、『女性学評論』創刊号の編集にたずさわったメンバーのなかに岡田山から去っていった、あるいは「女性学インスティテュート」から遠のいていった仲間たちがいる。それなのに、(それだから?) いままたその編集に従事し、「巻頭言」なるものを書く羽目になった、自らの単細胞人間ぶり、ただ何かを創造することに純粋な喜びを抱く単純さに、苦笑を禁じ得ない。

いま、あえて *Women's Studies Forum* という英語の名称を使用したのは、機関誌の命名に託された、その理念をあらためて想い、それが今後の「機関誌」編集の、そして「女性学インスティテュート」運営の指針であり続けて欲しいからである。周知のとおり、“forum”の語源は、「古代ローマ帝国の都市の中央にある広場」に由来し、いまでは一般的に「公開討論会/場」という意味で使用される。したがって、*Women's Studies Forum* こと『女性学評論』は、学問の専門分野を越境する、開かれた意見交換、討論の場として機能して欲しいとの願いを込めて発刊されたことを再認識したいと思う。

また、創刊10周年を迎えられるのは、なによりもまず、創意を凝らして機関誌の刊行を支えてきた各号の編集委員たちとインスティテュートの豊福裕子さんの地味な仕事に負うところが大きいと思う。そして、「女性と文学」(第7号)、「近代化と女性問題」(第8号)、「女性学の成立をめぐる」(第9号)、「女性と身体」(第10号)などの特集号では、ひとつのテーマで異なる専門分野のメンバーによる論考、評論、観想を掲載して、形だけでも“forum” = 「公開討論の場」を提供できたのではなかろうか。さらに、本年度の女性学インスティテュートの活動の一環として、1995年9月には、特集「女性学の成立をめぐる」の執筆者を中心にフォーラムが開催されたことは、インスティテュート開設以来はじめての試みとして特記しておきたい。

今後も、『女性学評論』が開かれた知の交流の場として活用されることを期待する。先鋭的フェミニストで詩人の、アドリアンヌ・リッチが夢みた「共通言語の創造」に想いを馳せながら。